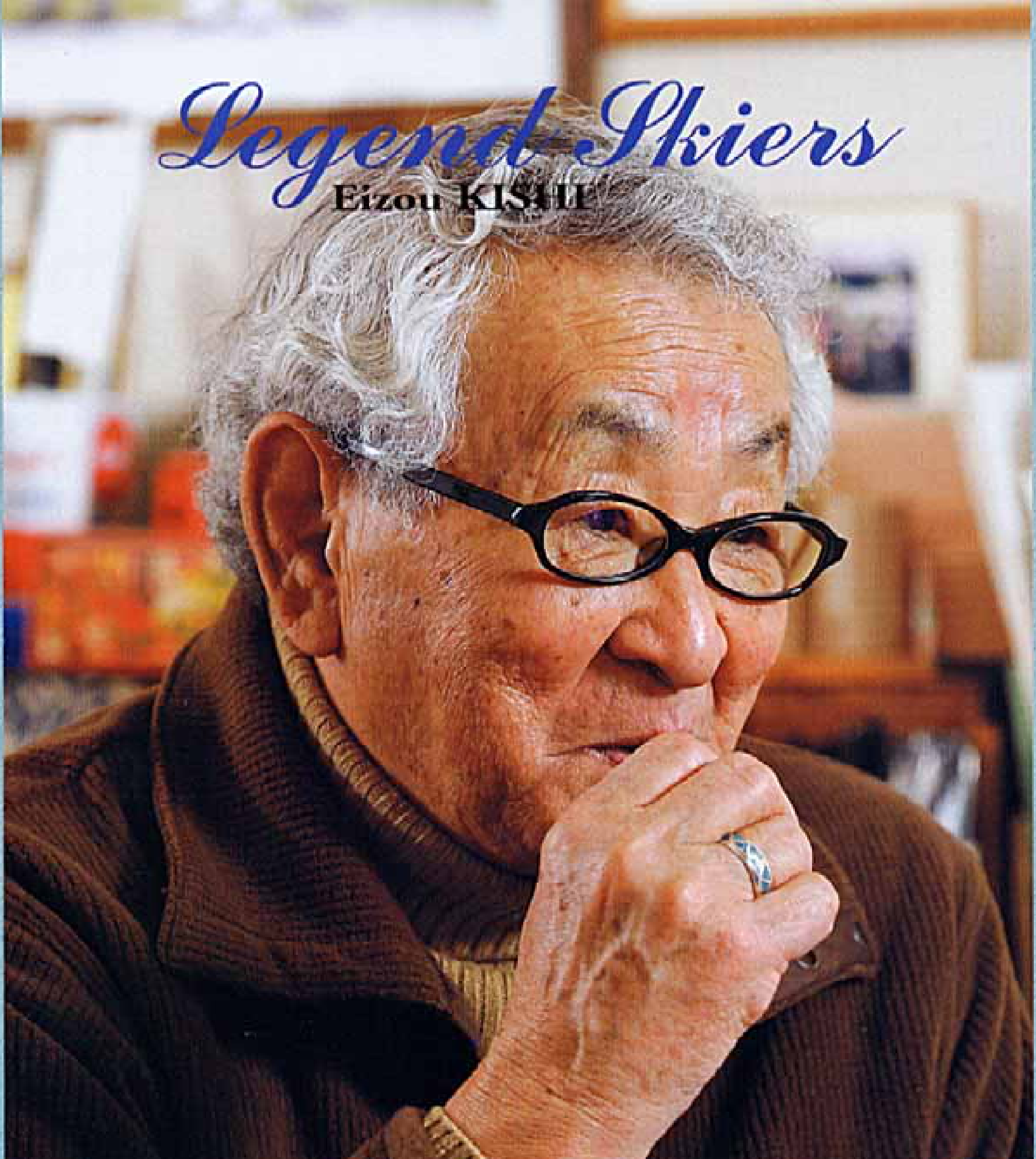
Legend Skiers
Eizou KISHI



岸英三
指導とは、教えることではなく

連載 日本スキー史•伝説の断片
第五回

文●時見宗和
写真●真嶋和隆（ポートレイト）
写真提供●岸英三
Text●Munekazu TOKIMI
Photo●Kazutaka MASHIMA

「お金もうけは商業。自分の己の持っている特徴を生かして、人のためになることをするのが職業。スキー教師は職業でなければいけない」。すべて即答。簡潔にして明快。軽妙にして洒脱。言い淀むこと一度としてなし。蔵王にその人ありと目されて半世紀。おそらくはスキー界の最後の豪族、岸英三。「指導する側は、自分たちにとって都合のいいことばかりやりすぎた」。82歳にして、いまだいささかもぶれることのない背骨を貫く哲学を追う。

蔵王に深々と根を張り、義のためとあらば上に向かって啖呵を切る。最後の豪族である。

「お疲れさまです」

「疲れてなんか、ない。今、起きたばかりで、何しようか考えていたところだ」

受話器に向かって取材の趣旨を伝えると、東京から北へ約四〇〇キロ、山形県の金山からこんな言葉が戻ってきた。

「なんだか、死にそうなやつの話を聞いてまわっているっていう話じゃないか』。ちょっと間をあけて「それはまことに正しい」

より正確に記せば「正しい」と『正しすい」の間あたり。文字にするといかにも乱暴だが、実際はその反対。冷え切った身体にアルコールを流しこんだときのような、ボワンとしたぬくもりが耳に残る。

岸英三。現在、八二歳。一九六四年（昭和三九年）の春、蔵王スキー場で行なわれた第一回デモンストレーター選考会で、デモンストレーターに認定。まぎれもなく日本スキー界のパイオニアなのだが、いわゆる「中央」での目立った活動はない。現職は金山町観光協会会長、金山町交通安全協会会長、山形県ライフル射撃協会会長、SAJスキー学校協議会会長、そして蔵王ハイムスキースクール会長。

かつてデモンストレーターは、生まれ育った地方のスキー場に深く根を張っていた。地域の代表者であり、独自のスキー観を持つ、一種の〝豪族〟のような存在だった。

だが交通網が発達し、情報の共有化が進むにつれて、豪族は次々と姿を消していき、そしてバブル経済はデモンストレーターのサラリーマン化を決定的なものとした。

だが、岸英三は、歴史の流れに与しなかった。ボワンと温かな金山弁でスキーを語り、義のためとあらば上に向かって啖呵を切り、今なお蔵王スキー場に深々と根を張り続ける。おそらくは最後の豪族。つい最近、スキー学校協議会の役員改選の席上、次のように話している。

「いくら腕が良くても、有名であっても、地元で評判の良くない人は役員にするな。地元で評判の良くないやつは、どこへ行ってもだめなんだ。（中略）全員

一致ならオレはもう一回会長をやるけど、何もしないぞ。ただし、あんた方がいいことをやっているのに邪魔者が現われたり、抵抗があったときは、前面に立ってあんた方をカバーする。相手がだれだろうが関係ない。たとえそれが組織の上の人間でも、対決する。そういう会長ならオレはできる」

――険しい尾根を越えて非常に美しい風変わりな盆地に入った。ピラミッド型の杉の林で覆われ、その麓に金山の町がある。ロマンチックな雰囲気の場所である。私は二、三日ここに滞在したいと思う。（明治一一年七月）――

三〇年に渡って世界各地を旅して歩き、その功績を称えられて英国地理学会の特別会員となったイザベラ・バード。その著書『日本奥地紀行』で賞賛された風景は、それから一〇〇年あまりたった今でも、当時の趣と美しさをそのものに残している。

『世界でいちばん好きな町なんだよ。これから一〇〇年かけて町作りをしようって、ゆっくりゆっくりやってんだ。ほら、交通安全とかよけいな看板がないだろ。オレ、みんな取らしたんだ。うつくしくねぇから。わが国の看板はな、細かく字を書きすぎてんの。あんのもの、車停めて、五分ぐらいかけないと読めないよ。だいたいからして官庁仕事なんだよ。やりましたっていう実績を残すだけの。スキー連盟がやっていることも、半分ぐらいはそんなもんだろ』。

しつこいけれど、ボワンと温かい。

春になると数百匹の錦鯉が姿を現わすという水路を越えて、『オヤジの別荘だった」築一二〇年の家の玄関をくぐる。

「これ、オレがスキー学校を始めた当時の蔵王のパラダイスゲレンデ。昨日、描いたんだ」

『どれぐらい時間がかかるものですか？」

『三〇分ぐらいかな」

リビングの壁一面に自らの手による絵が掛けられている。金山町のさまざまな風景。サンアントンを始めとする世界各国のスキーリゾート。フランスの世界遺産、モンサンミシェルなどの名勝。すべては金山弁が闊歩した軌跡である。

「なぜ絵を描くかっていうと、写真と違って想像や夢も描けっから。夏になったらこの山どうだろう、そう思いながら滑るのと同じなんだ。家を描くときは、ここのババア出てこないかな、なんてな。そういう

想像をちょこっと入れているから、絵じゃなくて挿絵、物語だな」
　岸英三がキャンバスに向かうようになったのは八〇歳になってから。生家から始まった風景画は、現在、六〇〇点を越える。「習うと絵じゃなくなる」からすべて自己流。鉛筆による下絵はいっさいなし。油性のボールペンで直接、書きつける。
「失敗したと思うことは？」
「失敗っていうのはねぇのよ。あまりよくできねぇっていうのはあるけどね」
　下書きなし、失敗なし、現実に夢や想像を織り込む——岸英三の絵の描き方を聞いていると、どうしてもその人生に重ね合わせたくなる。
　一九二二年（大正一一年）六月二八日、山形の山林王と呼ばれた三郎兵衛の三男二女の末っ子として生まれる。
　幼少の頃、父親が家の近くに私設ゲレンデを開設。ふもとに併設されたヒュッテ、杉杉（さんさん）荘とふたりの兄や仲間たちと腕を磨き、中学進学後、ノルディック競技を開始。蔵王通いが始まる。
「毎年二カ月ぐらい泊まっていた。蔵王はオレの、いわゆる田舎。オレは蔵王に育てられたんだ」
　北海道大学進学後も競技を続けたが、二一歳のときに学徒出陣。海軍二五四戦闘機隊に所属。愛機は零式戦闘機、通称ゼロ戦。両親に宛てて辞世の手紙を書き、酒を断った。「軍隊っていうのはやけ酒が多いだろ。やっぱり、よけいに飲んだのは、みんな死んだんだ」
　いくつかの赴任地を経て、二三歳のときに、現在、海上の真珠と呼ばれ、国際的なリゾート地として知られる海南島に配属される。
「『岸少尉』『はい』。呼び出されていってみたら『こんどはちょっと遠いぞ』『沖縄ですか？』『いや、もうちょっと遠い』『じゃあ、台湾ですか』『残念ながら、もうちょっと遠い』。聞いてみたらベトナムの東。オレだけだよ。言うこと聞かなかったから、とばされたんだな。しゃくだから長崎で遊んでいたら見つかっちゃって。けっきょく、現地に行くまで二カ月ぐらいかかったかな」
　上空に編隊が飛来したことを電探（電波探知機）が知らせたのは、一九四五年（昭和二〇年）一月五日一六時五三分のことだった。「サイゴン方面に向かっている味方の飛行機だろう」「上がってみないとわからないじゃないですか」。ひとり飛び立った岸英三が見たのは敵の編隊。奇襲だった。戦闘は一四分後の一七時七分に終了。飛び立った八機のゼロ戦のうち、生還したのは五機だった。

「学習は静けさのなかで、体験は大嵐のなかで」。金山の家のリビングルームには、岸栄三自身の学習と体験を証言する品々が並べられている

「戦争っていうのは〝戦〟と〝争〟があるっていうことがわかった。〝戦〟は空中戦とか目に見えるもの。〝争〟っていうのは心の争い。オレなんかは〝戦〟がほとんど。〝争〟をやったのはガダルカナルに行って餓死したり、内地で空襲を受けながら逃げまどった人たち。両方が合わさって戦争であって、オレには岸英三の戦争しかわからない。隣のやつはそいつの戦争をしていたんだ」
　よく戻ってきたな。無事、復員した岸英三への父親の命は「せっかく生きて帰ってきたんだから、何もしなくてもいい。遊んでろ」
　翌年、生家のすぐ近くの龍馬山（標高五二一メートル）を登山。取り付いてみれば、途中からほぼ絶壁。おまけに岩の質がもろく、下りるに下りられなくなって、ようやくの思いで登頂。きっかけは「なんとなく」だったが、このとき、心の奥底にあったのは、「戦闘機に乗って死ななかったんだから、何をやっても死なないんじゃないか」という思いだった。
　ほどなくして金山を離れた岸英三は、札幌で一年過ごしたのち、銀座を中心に東京で七年を過ごす。青田昇や別所毅彦、ピストン堀口らと遊び、雨が降れば金山の実家の屋号の入った番傘をさして並木通り闊歩する日々。
　前後してスキーを再開。大会に出場し、頼まれれば指導もしたが、折しもオーストリアスキーとフランススキーの技術論争のまっただなか。「こんなこと、どっちでもいいじゃないか」。嫌気がさした岸英三は「スキーすぱっとやめて」鉄砲打ちを開始。鴨猟はもとより、作家の戸川幸夫とつれだって知床半島にトドを追いかけるほどに熱中。この頃、新庄の駅前に二五〇坪の土地を購入し、マツダのディーラーを始めたものの「頭金が入っては鉄砲打ち、月賦を取り立てなかったから」二年半で二五〇〇万円の赤字で倒産。復員してからの日々の収支決算は、全額を見れば大赤字となったが、この間の人間勉強は、「オレの礎になった」
　転機はオーストリアからやってきた。
　一九六三年（昭和三八年）、オーストリアスキーの

Legend Skiers
Eizou KISHI

最高の技術なんてない。技術の極意とは、適当な技術を適当につかうこと

きし えいぞう

1922年（大正11年生まれ）、山形県金山町生まれ。第一期全日本デモンストレーター。学生時代はノルディック競技の国体選手として活躍。太平洋戦争中、学徒出陣。ベトナムの東、海南島で終戦を迎える。1963年、クルッケンハウザー教授と出会い、翌年、オーストリアへ留学。帰国後、蔵王スキーハイムスキースクールを開校。以後、今日に至るまで、蔵王を足場に幅広く指導活動を続ける。現在の蔵王スキーハイム校長、岸宏氏は英三氏の長男

礎を築き、世界のスキー指導の中心的存在であったシュテファン・クルッケンハウザー教授が、教程のモデルとなったフランツ・フルトナーとともに来日。苗場で開催された研修会で、岸英三はそのチーフ・アシスタントを務めることになる。

「わが友、わが息子」と、ことのほか岸英三をかわいがったクルッケンハウザーは言った。

「キシ、技術はもういい。すでに持っているのだから。スキー学校をやりなさい。教えるためには教える場が必要なんだ」。「やりたいと思いますが、やり方がわかりません」。クルッケンハウザーは答えた。「それならわたしのところに来なさい」

おそらくこのとき、戦争体験の側に傾き続けていた心のなかの天秤が、大きく逆側に触れたのだろう。翌年、岸英三はクルッケンハウザーがいるオーストリアスキーの総本山に「飛んでいった」。四二歳という年齢は、まったく頭のなかになかった。

「キシよ、スキーは下手な人ほど早く来るよ。上手な人ほどゆっくりゆっくり下りてくるんだ。ゆっくり滑る方法を知っているから」

「キシよ、スキーの楽しさは滑ることではない。雪の上で身体を動かすことが楽しいんだ」

「キシよ、スキーほど正直なものはない。うしろを振り向けば、全部、跡がついている。感動があるし、ごまかすこともできない。スキーから先は何もない。無だ。自分が思う限りの自由がある」

「キシよ、遊びは一所懸命、仕事は適当にやるものだ。なぜなら一所懸命というのは自分本位なものだからだ。しかし、仕事はそうはいかない。やり続けなければならないからだ」

間口が広く、奥行きが深く、どこか味のある指導をしたい。一〇人にひとり、一〇〇人にひとりができるような技術を教えるのではなく、だれもがスキーを楽しめるような指導をしたい。岸英三のなかに漠然とあったスキー学校のイメージは、クルッケンハウザーの言葉に刺激され、しだいに具体的なものになっていった。

「クルッケンハウザーがいなかったら、オレはどうなっていたかわからんな。クルッケンハウザーを信奉してから、スキーに関して迷ったことは一度もない。迷うっていうことは信ずるものを失ったときだから」

帰国後、岸英三は四〇人ほどのスタッフを集め、開校の準備に取りかかった。約半数は一級を持っていない者や、スキーを始めたばかりの者。「癖のついたやつはだめ」だと考えていたからだった。

「三食、食べさせて、小づかいあげて、生徒なんていなかったから、毎月、最低でも一五〇万円は持ち出しだ。だけど、スキー学校はもうかるものじゃないし、もうけようと思ったらやめたほうがいいんだ」

パラダイスゲレンデからスタートしたスキースクールは次々と分校を増やし、さらに岸英三はそれらを独立させていった。

平成に入り、学校長を子息の宏に代わり、会長に就任。

「現場から離れて、余裕ができたんだな。この頃、スキーを履かなくても、目を閉じれば、サンアントンや八方尾根や蔵王の樹氷原のなかを滑れるようになった。ああー、天気がいいなぁ、ちょっと休んで景色をながめるかなってな。ちょっと時間がかかったけど、ここまで来れば、もうスキー人だな」

「さあさあ、冷めないうちに、食え。ママのソバはうまいんだよぉ」

テーブルには片品そばに『校長ギョウザ』、小樽から届けられた数の子、手製のいぶりがっこ等々。校長ギョウザは岸英三オリジナルにして手製の揚げ餃子。見た目は無骨だが、味はこまやか。豚肉、ホタテ、甘エビ、蛤となんとも贅沢な具がたっぷり。

「オレな、反省していることあんだ。スキー技術を教えてしまった時期がけっこうあったなぁと思ってな。技術を教えちゃいけない。指導者はスキーをすることを教えなくちゃなんないんだ。技術っていうのは、物の使い方なんだ。ナイフとフォークの使い方と同じで、ステーキを味わうこととは別の話なんだよ。最高の技術なんてない。技術の極意とは適当な技術を適当に使うことなんだ。食べやすくステーキを切れればいい。人より細かく切れたって、なんの意味もないんだ。だけどまだ経験が浅くて不勉強だったときは、理屈や形を教えればいいと思っちゃったんだなぁ」

スキーをすることとは？

「旅をすることだな。スキーはゲームじゃない。長いスキー人生のなかで、点数や時間を争う時期があってもいいけど、それがすべてじゃいけないんだ。リュックサックを背負って出かけて、帰りには思い出をリュックサックにいっぱい詰めて帰ってくる。その間のすべてがスキーなんだ。指導とは、同じ道を一緒のスピードで歩き、ともに汗をかき、ともに腹を開き、ともに寒がること。つまり、指導者とは道連れだとオレは思う。ここまで来るにはずいぶん時間がかかったけど、それだけの価値はあったな」

スキーは人生の一部ですか？　それとも。そう問いかけると、岸英三は「それ、あんた、かならず聞くと思った」と言い、身を乗り出すようにして言葉を続けた。

「オレにとってスキーは一部じゃない。人生でもない。すばらしいものでも、好きなものでも、すてきなものでもない。すごくありがたいと思っているものなんだ。こんなに便利で、こんなにオーソドックスで、こんなに正直で、こんなに自己表現が自由にできて、こんなに身体によくて、こんなに友ができる。こんなのないと思うんだ。グリーンランドを横断したナンセンが言った。『スキーっていうのはすばらしい。こんなに便利なものがあると思わなかった』。『便利』、いい言葉だよな。この言葉に比べたら、勝ち負けなんて、こんなちっちゃく見える。スキーは遠い昔に生活のなかから生まれ、何百年も受け継がれてきた

「戦争仲間スキー仲間ってだめなんだ。仲間っていうのはただ単に同じ時期、同じことをやっている奴のこと。そのなかか友を選ばなきゃだめ。オレが左を見ているときに、右を見てくれている奴。親友とは、いつも逆のことをやってくれた奴だとわかった80歳」

ものだろう。そういうものを単なるゲームにしてしまったら、スキーの神様に申し訳ないと思うんだ」

「いいから、送っていくから。何分の汽車だ？」

取材を終え、タクシーを呼ぼうとしたところ、もののみごとに却下。

「オレな、最後にひとつ描いてみたい絵があんだよ。笑うかもしれないけどな。なんだと思う？」

この冬、初めての本格的な雪が、ボルボのフロントガラスに間断なく吹き付けている。

「三途の川なんだ。どうしても描きてぇの。ないとは言えないよな。おぼれている政治家を描いたりよ。ゴルフの練習する暇があったら、水泳の練習をしろってな」

新庄駅がぼんやりと見えてくる。

「今、あっためられる駅弁あるだろ、あれ、買ったらだめだぞ。あれは駅弁じゃない。冷たくても美味しいのが駅弁なんだ」

別れ際、岸英三は右手を差し出しながら言った。

「あんた、田舎ないのか。それじゃあ今日から金山を田舎だと思え。いつでも来いぃ」

駅弁は充分すぎるほど冷たかったけれど、東京駅に着くまで、「来いぃ」の三文字とちょっとのぬくもりが消えることはなかった。